

# 『ジョン・ダン入門』<sup>[1]</sup>

## ―背信と野心の詩人―

ジョン・ケアリ著

朝倉秀之訳

### 序文

ダンの同時代の人々は、全体として彼を独創的で比類なき詩人だと認識していた。彼は「詩の世界のコペルニクス」であった。ウェルギリウス、ルカヌス、タッソーを合わせたより偉大だということである。<sup>(1)</sup> ダンが掻き乱している、と考えて苦々しく思っていた伝統主義者でさえ、ダンの言葉の革命的起爆力を認めていた。スコットランド詩人ウィリアム・ドラモンドは、明らかにダンのことを念頭に置いて、「あらゆるものの改革者たち」が詩の「飾り」を壊して、「形而上的考え」を使って置き換えた、と説明した。<sup>(2)</sup> ダンの独自性は、確かに時として疑問視されてきた。ジョンソン博士は、ダンがマリノから借用したのだと仄めかしたし、現代の批評家たちの幾人かは、この仄めかしを基に発展させダンの詩と、バロック建築、マニエリスムの絵画、手の込んだバロック風文体、難解な文体、ユーフェイスム、その他後期ルネサンス現象などを混同するのに躍起になってきた。このような論理は、曖昧で支離滅裂で信頼に値しな

いし、そのような批評家たちは、分析すればすぐに消えてしまおうであろう。例えば、マリノの詩は、ダンの詩と比較されるが、あらゆる重大な面でダンの詩と異なっていることが示されてきている。<sup>(3)</sup> しかし、ダンの同時代の人々のように、ダンが独特であることを受け入れるなら、私たちはダンが理解できるという前に、ダンの着想の構造を調べ、何がそれを個性的なものにしているのかを知る必要が残されている。それが、この本の目的である。

ダンの限界を無視すると上手くないであろう。というのは、その限界がダンの特異な優位性の一部だからである。ベン・ジョンソンは、ダンを「ある分野では英国の第一級の詩人」と考えた<sup>(4)</sup> し、ダンが決して第一級ではない分野が、時として非難がましく述べられてきた。ダンの詩は、色彩と音楽がないとか。私たちは花、牧歌、神話、温かいユーモアや落ち着いた喜びを求めてダンのもとに行きはしないとか。ダンには、そうマッシュュー・アーノルドのように平静で一貫性があるわけでもなく、英国の田舎を愛するわけでもない。反対に、ダンには田舎の「野蠻さと気の抜けた退屈」について不満を述べる。この多くの短所によって、ダンの恋愛詩がジュリエッ

トやパーディタを抱擁したであろうかという疑いととも、ダン  
批評家の中のC・S・ルイスの賛同を得てこなかった。

幾つかの点で、ダンは今全く恋愛詩人ではない。語りかけていると  
思っている女性の身体的特徴などにダンに関心がない。またその人  
柄にも関心がない。すなわち、ダンの個性によって完全に消されて  
いる。性的に興奮しているように見えることさえない。官能主義者  
としてのヴィクトリア朝の詩人たちは、ダンより遙かに優れている。  
例えばブラウニングを取り上げてみよう。

そこにあなたは立つてください。

しかも温かく、そのうえに白く。このワインがそのあなたの

肉体のいたるところを洗うことが出来なかったのは

わたしがそれを飲み干してしまつたから。<sup>(7)</sup>

ダンの場合は、決してこのような目的がひとつの欲望には向かわない。  
しかし、ダンの時代の他の詩人たちはそれを取り扱った。バーナブ・  
バーンズは、自分がワインになつて恋人の喉を流れて行けばいいの  
にと願つた。<sup>(8)</sup> キャンピオンは、ふざけて彼女のお小水になつてもう  
一方の口から出るよ、と言ひ返した。<sup>(9)</sup> しかし、バーンズの詩が示す  
ように、キャンピオンは、いつもそれについて考えてきたし、それ  
が魅力的に受け入れられる鉱脈であることも知っていた。彼は、ブ  
ラウニングのように女性の肉体を切に望むとは何を意味するのかを  
私たちに感じさせる。ダンはそのうちではない。

ダンの詩の非日常性は、ダンにとつて全く明らかであつた。自分  
が「びつくりさせて」<sup>(10)</sup> いることを認めたが、喧嘩腰で自分自身の韻  
とバランスに固執した。「僕はセイレンのように、誘惑するために歌

うのではない。何故つて僕は甘くはないから」と彼の友人サミュエル・  
ブルックに書き送つた。ダンは今、他の詩人たちがやつてすることに  
ついて軽蔑的な見解を持つていて、ソールズベリーの伯爵婦人に宛て  
た書簡詩の中で彼らの陳腐な性的イメージを批評した。彼らの比喩  
ときたら、正に太陽を活気の無いものにしてしまつた、とダンは言  
う。

彼の乱れた光と散り散りの炎は

ただ婦人の鬘と髪飾りのためにのみ

恋人たちの歌の中で仕えるのだ。<sup>(11)</sup>

判で押したようにダンは今、陳腐な作詩法を捨て去る時さえそれを作  
り替える。彼の使う単語「乱れた」は、情熱を表す赤い編んだ髪  
の乱れを生み出し、三世紀経つてイエイツが「乱れて彷徨う星たち」  
を用いて再びそのイメージを目覚めさせた。当時の文学を見回して  
みて、スペンサーの『妊精女王』を生み出したような騎士道的ロマ  
ンスに対するエリザベス朝の風潮は馬鹿馬鹿しいと、ダンも明らか  
に感じていたのである。ダンは今「勇気についてのエッセー」の中  
で、「この機知の時代以前」の着想の時代から滑稽な要素を創り出  
す。当時「馬上槍試合、馬上旋回競技、森の中を馬で駆け巡ること  
による以外に」<sup>(14)</sup> 婦人を勝ち得る方法など知られていなかった。

特徴的ダンの着想の構造を辿るのに、私は詩だけではなく説教集  
や他の散文作品を使うつもりである。しばしば話題にのぼるのは、  
前期のダンと後期のダン、すなわち、詩人と説教者は異なつた人物  
なのかということである。ダンは、歳をとるにつれて、このことを  
信じたかと思つたし、信じているかのように話しもした。そのこ

とは、その思い込みがいかにかつ激しかったかを示している。例えば、『自殺論』をロバート・カー卿に送る時、書いたのは「ジャック・ダン」であって「ドクター・ダン」ではないことを強調した。<sup>(15)</sup>しかし、二人の人物がいたのではない。私たちが、詩と説教を読めば読むほど、ますます同じ精神の構造として見ることが出来る。それらは、同種の着想の欲求に支配されているからである。

そのことは、ダンが変わったということを否定することではない。意見を言う段階と社会的立場でダンが明らかに大きく変わった。人が一般に歳をとって成功するとそうなるように、ダンも自分を抑えるようになった。「好色な議論」や諷刺詩は、若いころに書いたものだが、悪魔の道具だとダンが信じるようになった。「寝に行く人」を書いた詩人は、聖職に就いてからは敬虔な純潔の提唱者となった。性交は結婚してさえ明瞭に罪の側にあると警告している。「諷刺詩三」を書いた詩人は、個人が王や政府に係わりなく真実の宗教を探し求める必要と権利を唱えてきたが、聖職に就いてからは全ての問題は本人が洗礼を受けた教会に残っていないなければならないと主張し、王と政府は「財政上と残虐行為の法律」<sup>(16)</sup>によってそうすべきであると本人に強制する際には、完全に正当化されるとした。

しかし、この新しい意見をいうのにダンは、充分に意義深くその反対のことを表現するために使っていたイメージを用いる。『諷刺詩三』は、真理が「巨大な丘のうえ」<sup>(17)</sup>にくつきりと立っているイメージがあるし、一六二二年の説教の中でダンは、英国国教会は「いたるところに見られるような、丘のうえ」<sup>(18)</sup>に立っていると述べている。ダンが二つの丘から引き出す意味は対立している。諷刺詩の中で真理は丘のうえにあるから、回り道をとる必要があり、それに到達する前に異なった教会が要求しているものを調査すべきだと論じた。

説教の中の彼の論旨は、真実の教会の丘の敷地が、全ての側から誤り無く見られるようになっていいるから、異なった教会が要求しているものを調査する必要は無いというのである。ダンの議論は、どちらにも取れるようにできていいるが、着想の核は一定である。すなわち単純化され、超現実的な風景、空っぽでただ一つの空恐ろしい特徴だけである。この風景はダンの中で循環している。その最も赤裸々な表現は、『恋人によせて』の中で、目覚めた恋人が乳母に語って聞かせる悪夢に気味悪く点火したところにていいる。

おお、おお、

乳母よ、ああ恋人が殺される。わたしは見たのよ、

雪のアルプスを一人で越えて行くのを。<sup>(19)</sup>

もし、ダンを読む際に、私たちが変わりやすい意見の代わりに型に嵌まった着想を見るなら、同じ寂しい岩山というこの現象を全く驚きの無い違った場面で見ることになる。ダンの世界の捉え方は、根本的に変わらない。だからダンは、基本イメージをそのやり方に応じて、自分の職業が投げ掛ける新しい主題に合わせるために採用しなければならなかった。例えば、『愛の発展』で、ダンは恋人の両足の間に「空っぽで空気のよう」に「漂う天球である。『一六一三年灰の金曜日。ヨークシャー州西ライディング』の中で、ダンは再び天球である。しかし、彼の軌道は、彼を十字架のキリストに連れていく。優れていて数学的で天使のような天球の動きは、幾つかの彼の最も深い危惧を満足させた。そこで彼は、話題が何であれそれについて書く口実を見出した。同じことは黄金と子宮に対していえる。二つを彼は長いあいだ考えずにはいらなかった。『愛の発展』は、

ダンが黄金の鉱脈として探究するつもり恋人の子宮と「中心の部分」を描き出す。一六二四年の説教は、全能なる神が恋人にとつてかわつてゐるのを示す。「中心の黄金、内臓の黄金、胸中の黄金」は、ダンが会堂の聴衆に「神の母体であり子宮」の中にある、と語る。その同じ説教が、神を黄金の「西半球」だけでなく香辛料の「東半球」にもしてしまう。実際に神は「香料と金鉱のある二つのインド」である、というように。ダンのかわいい黄金の恋人は、『日の出』の中でまさにそうだった。東と西を一緒に連れてくるのが——ダンがいつも頭を悩ませている考えであり——山脈、天球、黄金、子宮のように区別されることなく神と恋人に適応されているのが分かる。

たぶん、ダンには自分の中のこの着想の連続性を知っていたのである。他の人々の中でそれに気づいたのである。彼は、初期の説教でどのように予言者たちと他の聖書執筆者たちが、この世の仕事に特有の語句の隠喩や気質を留めてきたかを見ている。<sup>(23)</sup> 説教をする時、彼の恋愛詩からの語句が口から次々に飛び出す。悪夢でうなされた恋人の「真夜中の驚き」は、神の前での無神論者の「真夜中の驚き」として再び現れる。『日の出』からの「時のぼろきれ」は神の永遠と対照されて出ている。『恍惚』の中で「なお再び二倍になり、殖えていく」移植された花はデンヴァー婦人になり、彼女のためのダンの記念説教の中では彼女自身が花のように「移植される」ことによつて「二倍になり、殖えていく」。『離別—嘆くのをやめよ』の有名なコンパスは、「ぼくが始めたところで終わらせてくれる」固い足を持っているが、神の摂理の道具として説教集の中では神の手に置き換えられている。神は「自らのコンパスを回して、始めたところで止まる」。『愛の成長』の中で優しい愛の行いは、花咲く木々のように「いま蕾を開く」。説教の中では木々は、処女降誕の象徴として「蕾を

開く」。「この皺を墓穴と呼ばないでくれ」とダンは『秋の人』の中で抗議する。しかし、説教壇からダンは白粉で「自らの顔の皺、墓穴」を隠している婦人たちを叱る。等々。

もちろん、単なる偶然の繰り返しにすぎない。すなわち全生涯を言葉を紡ぎ出して過ごす精神の反射的行動である。しかし、その繰り返しは、言葉が育つてくる着想の過程の中で連続性を示す。時として説教集の中で、ダンは若い時代から全ての詩を再び生きているように思われる。

神は、私の最も汚れた中でしばしば私に目をとめていてく  
ださった。私が昼の目である太陽と闇の目である蠟燭とあら  
ゆる人の目をカーテンや窓やドアで締め出してしまった時に  
も、神はなお私に目をとめ、慈悲の中に私を見守りくださ  
った。神が私を見守つてくださることを私に理解させてくださ  
ったからなのである。<sup>(24)</sup>

その神は、そこで「カーテンや窓」を通して見ているのだが、『日の出』の中の恋人同志を「窓を通して、カーテンを通して」見ている忙しい耄碌した馬鹿な太陽と比べてみるともっと尊敬に溢れた言い方になっている。

ダンの作品を通しての言葉とイメージの再現を辿ることは、読者がお分かりのように、この本がダンの着想を調べる際にとる一方法である。たくさんの著者や芸術家のように、ダンには強迫観念があり、そこで、彼の中での繰り返しは当たり前である。批評家たちはいつも理解力が深いとは限らなかつたけれど、それに気づいてはいない。例えば、C・S・ルイスはそれをダンの限られた学識の表れと

とっている。「知識の寄せ集めの幾つかは」とルイスは解釈する。「天使の意識や人間の中の三つの塊についての知識のように、むしろ頻繁に出てくる。——劇の軍隊の兵士たちのように」<sup>(29)</sup>しかしながら、ダンの教育的欠点に対して勝鬨をあげることは、たとえそれがいかにも正当化されようとも、目的に沿うことではない。ある考えにダンが熱狂的に執着していることが、彼の芸術の個性にどんな光を投げ掛けることができるのかを調べるの方がより賢い道のように思える。

彼が執着している考えは、二つのルイスの引用のように、一般的に神学的問題に属し、それだけで自然と批評家の何人かを締め出してしまう。ダンの中のその価値ある要素は、詩と説教集からの最高のものを構成していることと、彼の全作品の残りは、歴史の詰まらない話しに委ねられることになることが安全なだと推測したくなってくる。例えば、エヴリン・シムプソンは、ダンを「言葉の魅力の使い手」として賞賛しているが、彼の時代に使われていた言葉の多くは「陳腐な議論と、教父たちや教師から受け継がれたガラクタ」<sup>(30)</sup>で出来ていたことを嘆いている。しかしながら、事実はその魅力を仕込む着想が、その興味あるガラクタを見つける者と一致したままである。もし私たちが、理由を発見出来るならば——もしダンを魅了している形態をガラクタの中に収めることが出来、彼の詩的な熱心さとその形態を結びつけることが出来れば——その時私たちは、その魅力が任意の魔術的出来事ではなく、統合された意識の結果であることを見るようになるかもしれない。

この批評の手続きは、明らかに、宗教的真理の原理としてではなく、むしろ着想の選択としてダンが自ら執着する教義を見ることを当然必要とするであろう。しかしその時、それは何が宗教的教義で

あるのかということである。なぜなら、その教義の究極の真理、あるいは欺瞞は調べようがないし、全ての利用できる証拠になる言葉は——聖書の証言のように——あまりにも広義に解釈できるので問題の中での個々の決定は、結局のところ信者（あるいは信者でない者）の心理的な好みに基づくことになる。すなわち、その人の個性と着想の構造によるということである。このように見ると、一家の宗教的信条はその創造力の所産に非常に貴重な基準を与えている。（もちろん、作家の政治的、道徳的見解が与えるようにである。その見解は同じように恣意的好みに基づいている。）

たぶにこれは、全てT・S・エリオットが言ったことの焼直しにすぎない。その時エリオットは、ダンが「概念が与える感情に興味を持ったから」<sup>(31)</sup>概念を取り出した、と言ったのである。——ただ私が論じようとしているのは、エリオットが観察しているものがダンの部分に関する個人的逸脱ではなくて、どんなに私たちがそれを私たち自身から隠そうとしても、普遍的な習慣なのだ、ということである。

だから、この研究は原罪、神の選び、復活、死後の魂の状態のような激しく議論を呼ぶ問題についてのダンの様々の意見が愛と恋人についての詩と同じ着想によって生まれたことを示そうとするのである。意見は退屈な脇道ではなく、生きている全体から出た一つ一つであり、その中であらゆる部分が明らかに、お互いに明らかにされる。

ダンの精神力に対して共感する感情を持つために、私たちは、彼の生活と自らを見出した社会について少し学ばねばならない。私の初めの章は、基本的自伝の事実を（知られている限りに）述べる。一方、経歴の中で二つの極めて重大な要因、ローマ・カトリ

ック教会の離脱と野心が詩に与えた影響を吟味する。後半の章は、自然の、有機的世界に対して、変化に対して、死に対して、人間の理性に對してのダンの反応を見ていく。これらの主題は、その回りに彼の着想と知性が最高潮になるので選ばれているのである。最後の章はダンの統合あるいは融合にたいする熱意に焦点を絞る。それが最後となる。というのは、もしダンをダンたらしめる一つの本質があるとすれば、これこそが、それだからである。

## 第一章 背 信

ダンについて覚えておくべき第一のことは、彼がカトリック教徒であったことである。第二は、彼が自らの信仰を裏切ったことである。彼は、一五七二年に生まれた。彼の父は、成功したロンドンの商人であり、鉄器商組合の理事の一人にまでなった。ダンが四歳の時に亡くなり、彼の未亡人は、六カ月もたずに再婚した。二番目の夫になったのは、裕福なカトリック教徒の開業医で、王室医科大学の学長でもある医師ジョン・サイミングズであった。ダンの母は、父親のように、カトリック教徒であったばかりでなく、英国で最も著名なカトリック教徒の家族の一つの一員だった。彼女は、詩人で劇作家のジョン・ヘイウッドの末娘で、ヘイウッドの妻は——ダンの祖母にあたるが——ジョン・ラステルで、トマス・モア卿の姪だった。だから母方から見ると、ダンにはモアの家系の出身であり、その家系は初期十六世紀の英国の知識人の中でも第一級の人々で、国際的に有名かつ敬虔なカトリック教徒であった。ダンはこの家柄を充分に承知していた。彼がトマス・モア卿と彼の「ローマ・カトリックの信仰の誠実に固く立っていること」に触れる時、それは確

固たる誇りを伴っていた。

エリザベス朝の英国でカトリック教徒であることの不利な立場は、一般化するのが難しい。一方では、ダンの父や継父の経歴が示すように、もし十分に慎重にあるいは、充分に繋がりがあれば、成功することは可能だった。他方では、はらわたをひきずり出されてお終いになるかもしれない。国際政治の中の成り行きは、事件に何も係わっていないくても、状況を突然もつと危険にすることがある。カトリックの信仰に忠実であり続けられれば、公の生活で仕事をする望みを持つことは出来なかつた。カトリック教徒の学生は、第三十九条に署名すべきであるという条件によって大学の学位を取ることが阻まれていた。

英国国教会に加入するための金銭上の誘因は強かつた。一五八五年の法令で、英国国教会の礼拝に出席するのを拒むカトリック教徒は、一カ月二十ポンドの罰金を課せられることになった。当時の平均的教区の学校長の給与は、私たちが知る必要があるが、一年間二十ポンドだったのである。支払えないことが分かつた違反者たちは、持ち物全てと土地の三分の一を没収されることになっていた。この法律は、カトリック教徒が不平を言ったが、とても厳しく強制されたので小作農や百姓は自分たちや子供たちの暮らしのためにたつた一頭の牛しか持っていないくても取られてしまった。割り当てる家畜がない英国国教会忌避者の家々は、ベッド・シート、毛布、食料、それに窓ガラスも奪われた。セシルは、噂ではあるが、「わしが、カトリック教徒どもをこんな風に貧困にしまえば、やつらは、豚みたいに豆の殻でも見つけて喜んで食らうであろう」と豪語したという。

反カトリックの法律は、如何なるイエズス会士あるいは修道僧に

とつてもエリザベス女王の主権の中にいること自体が、同様に大逆罪となり、いかなるカトリック教徒も聖職者を逃がしたり、受け入れたりすることが重罪となった。事実上、これはカトリックの信仰を受け入れることが、重罪であることを意味した。なぜならミサにあずかったり、告解をするために司祭を受け入れることが必要だったからである。スパイ、すなわちカトリック教徒の何人かは、司祭や仲間を裏切つて、ミサが行われることになっていく場所を前もって当局に通報した。カトリック教徒の所帯は、手入れを受けるのが当たり前になっていて、司祭を匿った場所を捜索されるとき、壁は壊され、部屋は限なく探され、床は引き剥がされた。その家主は、この損害を負担しなければならなかっただけでなく、揉め事のためにやつて来る捜索隊にも支払わなければならなかった。カトリック教徒の個人の生活の中で、彼らは明らかに恐喝と強迫の餌食だった。彼らは、個人の損害に対する赤字分を要求することは出来なかったし、負債となったお金を取り返すことは出来なかった。そんなことをしようものなら、摘発されて自らを危険に晒すことになった。

この迫害を受けた犠牲者の中で恐怖が急速に広がった。ある晩エリザベス女王の議会は全てのカトリック教徒を殺戮する法令を通過ぎさせた、という報告が駆け巡った。それゆえに恐怖を覚えた家族は、家を棄てて、野原で夜を過ごした。他の者たちは、ボートを頼んで川を上ったり下ったりして漂った。この警告は先ず一五八五年に起こり、アルマダ艦隊が破れるまで続いた。そこで、そのことがダンの青年期の初期の一つの特徴であった。同じ時、新しい監獄がウィズビーチ、エリーそしてレディングに建てられ、カトリック教徒で一杯だった。女性の英国国教会忌避者のための監獄分室が、ハルに開所した。一般監獄の中でカトリック教徒は処罰された。カト

リック教徒と一緒に監禁されていた重罪人たちはけしけられられてカトリック教徒を罵つたり、彼らから施し物やパンを奪つたりした。英国のイエズス会士のジョン・ジェラードは報告している。家で雇っていた男の召使が捕えられ、ブライドウエルで拘留された時、肉体と魂を共に養うのに十分な食べ物を殆ど与えられなかった、という。彼の独房は小さく、ベッドが無く、ゴキブリなどがうようよしていて、そのために窓棚に鳥がとまる恰好で眠らなければならなかった。獄吏たちは独房の中でその召使の排泄物を蓋なしのバケツに放置したままだったので、その臭気で呼吸が出来ないほどだった。詩人で殉教者のロバート・サズウエルはまた、カトリック教徒の囚人たちを組織的に餓死させていることを証言している。

「ひどい空腹のため何人かは、壁の水滴をなめていた」。

カトリック教徒の嫌疑を掛けられた者に使われた幾つかの拷問はひどく悪質だったので、サズウエルはどうしてもそのことを話す気になれないでいる。しかし、描写しているものは震え上がらせるのに充分である。囚人たちは睡眠を奪われ、ついには理性を使えなくなった。拷問台の上で手足をバラバラにされた。機械で巻き上げられボールにされ、「そんな風に潰されたので、血が身体の到る所で噴き出した」。拷問が引き起こした混乱が大衆の中である激変をもたらしたので、エリザベス女王の主任拷問官トックリフは手枷として知られる巧妙な物を作り出した。柱の上に高く取り付けた鉄製の長手袋だった。尋問される囚人は、そこに両手首を入れられ、ときには数時間も吊るされたままだった。この拷問を経験したジェラードは、自伝の中でその手順の説明を加えている。そのやり方は、いかに慙懃無礼であったかを伝えている。「我々はある種の厳肅な行列をして拷問部屋に行きました」と彼は思い起こしている。「案内人が火を

灯したローソクを掲げて先導したのです。彼に質問することになって、いた五人の尋問官の中にフランシス・ベーコンがいた。ついにジェラードが柱から吊るされたのだった。

締め付ける苦痛がわたしの身体全体にやってきました。胸と腹、両手と両腕が最悪でした。身体じゅうの血がみんな両腕、両手に上ってくるように思えたのです。血が指の先端、皮膚の穴から滲み出しているのだ、と考えました。……苦痛があまりにもひどくなつてとても耐えられないだろう、と思いました。

ジェラードは、実際、五時間それに耐えた。その間じゅう八回か九回気絶し、その度に回復するまで支えられ、それからまた吊るされたままだった。彼は、頑なに仲間のカトリック教徒を裏切ることを拒否したので、尋問官たちは、落ち着かなくなつた。「それではお前が、柱で腐り果てるまでそこに吊るすぞ」とウィリアム・ウェードは叫んだ。彼は外交官で、後にジェームズ一世にナイト爵に叙せられるのである。ジェラードは次の日も同じように吊るされた。しかしその後、彼が口を割らないし、根を上げないことを尋問官たちは悟った。彼の両腕はあまりに腫れ上がっていたので、服を着ることができなかつた。三週間たつて、はじめてナイフを持つことができた。

実際に死刑を執行されたカトリック教徒の数は、二十世紀の残虐行為の基準からみれば全く少ない。一五八五年の新しい反カトリック法が成立してから、エリザベス女王統治下の終りまでの期間に百人の司祭と二人の女性を含め、五十三人の平信徒が死刑になつた。しかしながら、その犠牲者を処理するために使われた方法は、多く

の場合、いい加減な人体解剖であつたにもかかわらず、見物人がそれが相当に奇抜であるという理由で興味を持ったので、注目を浴びた。バビントン陰謀事件は、政府筋が最初から知っていて、煽動したと言つても過言ではないのだが、一五八八年に「発覚」したとき、通達が刑執行人に下された。エリザベス女王自身その発案者であり、それには「さらに恐怖を起こさせるために」首謀者の若者の腸を生きたまま引きずり出せ、と記してあつた。この執行は、明らかに見物人たちの何人かを怒らせたので、政府は、即座に女王様も嫌悪の念をいだかれ、付和雷同の共謀者たちに対してはさらに慈悲深い殺人罪の法令を賜つたという公文書を出したのだった。<sup>6)</sup>

しかし、人体解剖は、カトリック教徒に対する治療と称して行われ続けたことは、目撃者の証言で明らかである。ローマ・カトリック教の信仰を受け入れることは重罪になる。「英国国教会改宗法」<sup>7)</sup>で殺されたジョン・リグビーの運命はこのことをよく物語っている。リグビーは吊るされた後、あまりにも素早く切り落とされたので「ちよつと驚いた男のように」まっつぐに立つた。そのあと死刑執行人は、彼を地面に投げ捨てた。彼はハッキリと「神様があなたを許して下さいように。イエズス様がわたしの魂を受け入れてくださらんことを」と言葉にするのを聞いた。そのため見物人の一人が、彼にもう喋らせないようにと喉の上に足を乗せた。他の見物人たちが彼の両腕と両足を抑えている間に、死刑執行人は彼の生殖器を切り取り、内臓を取り出した。心臓を取り出そうと身体の中に手を入れた時、リグビーは「まだあまりに強かつたので、両腕を掴んでいた男たちを突き飛ばした」。

こんな風な裁判のやり方に直面して、英国カトリック教徒たちは憐れみと恐怖だけでなく孤立感をいだいた。自分たちの仲間である



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

英国人が単に無関心というのではなく、カトリック教徒たちの挫折を喜んだのだ。英国イエズス会士ウィリアム・ウェストンはバビントン陰謀事件の死刑執行について書きながら、思い起こす。「われらの不幸な出来事のまっただ中で鐘が町中に鳴り響き、説教やドンチャン騒ぎがおこり、火花が上がリ、一般の通りでかがり火が焚かれた」。その苦しめられた少数者たちが、自分たちは人間の中にいるのではなく、馬鹿騒ぎをする悪魔みたいな者たちの中にいるのだ、という感情を持ったとしても許されたであろう。

読者の中には、この様なこと全てがダンの詩を扱うこととどんな関係があるのかと尋ねる人があるかもしれないが、私としてはそういう人は殆どいないと思っている。ナチのユダヤ人迫害が一九三〇年代のドイツの若いユダヤ人作家を扱うこととどんな関係があったのかと問うことで、それなりに納得できるであろう。ダンは、恐怖の中に生まれ、恐怖が育て上げたのである。そのことが、他の様々な事の間にあつて、彼の読む物を決定した。英国人の書物ではなく、ヨーロッパ知識人の書物だった。彼は一五九〇年代の文学の世界で締めりが無くなつていた愛国的英文学の潮流から離れていた。他方で、彼はダンテを原語で読みこなす当時の数少ない英国人の一人だった。彼はラブレームも読んでいた。一友人が手紙で、スキャンダラスな評判を持った作家、保守的な英国文壇で囁かれることは滅多になかったアレクサンダーについてダンに尋ねたとき、ダンはその友人にアレクサンダーの作品について専門的な概要を伝える事が出来た<sup>(8)</sup>。英国人に関して、初期の詩や『諷刺詩』や『エレジー』の中のダンの評価は嫌悪に震えている。英国人は粗野で、心の狭い物欲主義者である。足と息が臭く、腹が突き出た独りよがりの人たちだ。たっぷり食べ物を詰め込んで、肘掛け椅子に嵌まり込んで夕方を駈をか

いて過ごす。ダンには『エレジー』の中で挑発的にこの重苦しい奇形の輩を欺き、不貞をはたらく。彼は社会の周辺で生き延びる。困窮し、疲れ果ててはいるものの、勝利をもたらす裏手階段や脇道の巨匠である。英国社会が自分の信じたカトリック教信仰の立場に対してその道を閉ざしてしまったことを見る事ができた若者にとつて、魅力のあつたのが架空の人生であつた。ダンが、多くの英国の人々から気難しげに引き籠もっていることも彼の詩の型に反映している。ダンの詩は数人の気心の知れた仲間内の回し読みのために作られたので、上等な上に難解なので、ダンがその中で生きてゆくのは不運であつた粗野な人たちや生半可な人たちに対しては全然譲歩がない。明らかにほとんど、ダンの強情なまでの自惚れと必ず成功するという固い決心は（私たちが後で見ると、永久にその詩を特徴づける要素であり、何人かの批評家が、酷評してきた要素でもあるが）彼の若い頃に経験した不正と犠牲に対する全く自然な反応であつた。

家族の血縁関係のためにダンはその嵐の真つ只中に引き込まれたし、最大の注意を払つてでも残虐な姿を見つめざるを得なかつた。その犠牲者たちは英国の若者の中で最も才能も勇気もある者たちの中にいた。エドモンド・キャピオンのような若者たちが一五八一年に死刑になつたが、教育を受けるために海外のカトリックの大学に行き、自殺的使命を帯びて帰国したのだった。反キリストから母国英国を救うために喜んで殉教を受け入れたのである。私たちはダンがこの様な死刑執行に参列していたことを知っている。彼はカトリック教徒の見物人が自分たちの危険をも顧みず、その司祭のざたざたに切られた身体に向かつて祈りを捧げ、その新しい殉教者が彼と共に自分たちの祈りを天国に持って行ってくれるように望みを込め

ていたことを記している。<sup>(10)</sup>

たぶん若きダンはこちらの光景を目のあたりにしたのであろう。しかし、彼の母親が勉強のために雇ってくれたカトリック教徒の家庭教師たちの監督の下にであった。彼らの目的は少年の心の中に競争心を煽ることであった。というのは殉教は彼の家族の中にあつたし、注意深い教化と神の恵みと共に彼自身が栄光の仲間入りをすることは当然のこととして望まれていたからである。彼らの努力は無駄ではなかつた。殉教者の冠は彼らの生徒であるダン少年の目の前で輝いた。彼は倦むことなくそれを見続けていた。そして遺産の一部と言つてもいいほどそれに注目するようになった。「私は絶えず目覚めさせられてきた」とダンは私たちに言っている。

殉教を瞑想するとき、カトリック教徒の家系の出身であり、そんなに遠い親類縁者ではない家族は、私はそう信じているが、いままで以上にローマ・カトリックの教義を教える教師たちに従うことで人と財産の面でさらに忍耐させられ、苦しめられてきた。

家族の受難についてのダンの記述はほとんど誇張がない。ダンの祖父ジョン・ヘイウッドは英国国教会を受け入れるよりはと一五六四年に外国に逃亡した。十年後、一五七四年の棕櫚の日曜日に、ダンは二歳だったが、政府の捜索隊がダンの家の近くのカウ通りのブラウン夫人の家にやって来て逮捕した。聖オシス教会の元修道僧でダン夫人の叔父のトマス・ヘイウッドが逮捕されたのだ。六月十四日、彼は通常の酷たらしい方法で死刑になった。<sup>(11)</sup> ダンの二人の叔父、エリス・ヘイウッドとジャスパール・ヘイウッドはイエズス会

士になった。<sup>(12)</sup> ジャスパールにとって、それは約束された出世を投げ捨てることを意味した。彼は当時のエリザベス女王の近習であつたし、マートンとオールソールズ両大学の特別研究員だつた。家族の他の人たちのように、ジャスパールはトマス・モア卿を追慕していた。ハツキリしているのは、エリスとジャスパールが貴重な形見を持つていたことである。それはトマス・モア卿の一本の歯で、それが不思議なことに二つに割れ、一人ひとり半分ずつ持つ事が出来た。ローマでイエズス会士の誓いを立てた後、ジャスパールは不法に英国に再入国し、イエズス会伝道会の責任者になつた。彼は暫くダンの家に逃亡していたように思われる。確かに彼はダンの母である姉と接触していた。そこで子供たちは実生活の冒険物語の真つ只中にいるのが分かつた。それは全く遊びではなかつた。一五八三年ジャスパールは追い詰められた。彼は英仏海峡を越えて逃亡しようとしていたが、舟が嵐にぶつかつてしまつた。他の五人の司祭と共に裁判にかけられ、大逆罪を宣告され、縛り首そして手足をばらばらにされる宣告を受けた。ジャスパールがロンドン塔にいたとき、ダンの母は彼を訪れ、慰めている。こつそり彼と彼の仲間のイエズス会士ウィリアム・ウエストンとの手紙を運んだりした。対決を勧めるためにやつて来たのだ。遂に、ウエストンはダンの母の訪問の一つに同行してロンドン塔に入つて行くという計り知ることの出来ない危険をおかした。その結果、その囚人の相談に預かることが出来た。ダンは、たつた十二歳だつたけれど、この突飛な行為で一つの役割を演ずるために選ばれ、連れて行つてもらつた。たぶん、ダン夫人は子供を連れて行くことで看守の持つ疑いを和らげるとの計算も働いたであろう。変装したウエストンは若者の父親としてことが運んだかもしれない。とにかく、ダンが行つたことははっきりしているようだ。

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

なぜなら、彼は後に「故エリザベス女王の時代にロンドン塔でイエズス会士たちの諮問<sup>(13)</sup>」に立ち会っていることを思い出しているからであり、他にこれに関して考えられる時は知られていない<sup>(14)</sup>。

彼は何を感じたのであろうか。ウエズトンはその伝記の中で彼自身の恐怖を思い起こしている。「それは、巨大な胸壁で囲まれた屋根を見、看守が鉄の門の付いた門を通って案内してくれ、その門が私の後ろで閉まったときだった」。十二歳の子にとって陰気な敷地内はもっと怖がらせさえたであろう。彼は正に大きな獣の巣に入ってしまった。危険な侵入だと感じたとしても不思議ではない。「ぞつとずる様な八フィートの背丈で鎖に繋がれた」男の記憶が、門の前の巨人のように大股で迫ってきて、あまりにも生き生きと出て来たときにダンが若さ溢れる恋愛詩を書くようになったのである<sup>(15)</sup>。恐怖と混ぜ合わされた恨みがあったのか。少年は叔父やその秘密めいた見知らぬ人である厳肅で信仰深い男たちが自分の母親の愛と忠誠心を越えて持つその威力を嫌悪したであろうか。威力はとも強くて母親があの人たちのために全生涯を捧げる覚悟ができるように思えた。たぶんそうだったのであろう。というのはダンが後に個人の恨みを反映していると思われる不屈の精神を持ってイエズス会士に対する憎しみを爆発させることになったからである。彼は非妥協的態度をとっている彼らを許すことが出来なかった。結局彼は彼らだけが全ての殺人と苦悩に対して責められるべきだと感じるようになった。なぜなら彼らは英国のカトリック教徒に協力することを許さなかったからである。彼らはカトリックの信仰には全面的な忠誠を、英国皇室には全面的な反対を要求した。そこで揺るがぬ正しさがいつももたらす憎しみを自らに招いた。

若いダンにとって、妥協することがますます最高に魅力的な道の

ように思えたに違いない。彼の家庭教師たちは「抑圧され、苦しめられた宗教の側の人々で、頭の中で描いた殉教の死と飢えの恨みに慣れつこになっていた<sup>(16)</sup>」。しかし、彼らは彼がそんなにも飢えていることが分からなかった。彼はカトリック教系の大学の一つで教育を受けるために海外に出されなかった。しかし、その代わりオックスフォード大学のハート・ホール校へ弟のヘンリーと一緒にいった。そこはカトリック教徒のお気に入りの場所だった。なぜなら、チャペルがないので公的な礼拝を避けるのを簡単にしていた。

司祭たちとイエズス会士たちによって恐ろしい話が流された。それはカトリック教徒に起こったことについてだった。彼は、英国国教会忌避の罰金を逃れるために英国国教会の礼拝に出席していた。ノーフォーク州のブレックルズのフランシス・ウッドハウスという男は、記録によると、その罪に汚れた教会堂に入るやいなや胃が焼けた炉になるのが分かった。彼は火を消そうと八ガロのビールを飲んだ。しかし、司祭が彼の懺悔を聴くために連れて来られたときだけ熱が弱まったという。彼は再び心が揺らぐことは無かった。ダンはこのような事件を知っていた。というのは大学に到着する少し前に一つの事件が起こったからである。フランシス・マーシュという学生が誘惑に屈して英国国教会の会堂に入ったが、その後すぐに後悔の念で理性がぐらついた。彼は裸になり、大学から出て行き、市場の広場に向かってオックスフォードの町中を走り始めた。彼は逮捕され、強制的に押さえつけられ、寝かされ、友人たちが彼を宥めようとした。しかし、彼は慰められずに、二日たって死んでしまった。「彼は本当に苦悶して衰弱していった<sup>(17)</sup>」と当時の人が記録している。このような見せしめはダン以前には背信者が受けるべき超自然の出来事を含んでいた。

ジョンとヘンリーの兄弟が入学を許可されたとき、歳はそれぞれ十一と十歳だった。実際にはこれより一歳上であったが、法律は学生に十六歳に達したら第三十九条に署名することを要求した。カトリック教徒には問題外だった。そこで規則を回避するために、しばしばカトリック教徒は非常に若くして大学に行くか、あるいは歳を偽った。あるいは、ダン兄弟がしたように両方もあった。

私たちは、いまダンの生涯の最も不鮮明な時期に差し掛かっている。一五八四年十月にオックスフォード大学に入学を許可され、テヴィス学寮リンカーン法學寮へ移ることが認められた。そこで一五九二年五月に法学の予備の勉強で少なくとも一年は過ごさなければならなかった。この二つの日付の間の行動については、確かなことをいうことは何もできない。先ず第一に、私たちはオックスフォード大学にどれくらい在籍していたのか知らないのである。カトリック教徒として当然学位を取ることから締め出されていた。なぜなら必須の「英国国王主権の宣誓」を取ることが出来なかったからである。ダンの最初の伝記作者であったウォルトンは後半の生活だけを知っていて、若い頃のダンには信頼性が無いかもしれないが、ダンは十四歳ぐらいでオックスフォード大学からケンブリッジ大学に移り、そこからロンドンに引越して十七歳ぐらいにリンカーン法學寮に移るのを認められた、と言っている。ダンがケンブリッジ大学にいたという記録は何もない。しかし、そのことがウォルトンの記述を認めないことではない。ケンブリッジ大学の記録は不完全であるからである。ウォルトンは明らかにダンの日付を間違ったのである。年表によるとダンは一五八八年か一五八九年（十九歳）にリンカーン法學寮に入った。ところが文書記録は一五九二年が正確な日付であることを示している。しかし、それにも係わらずウ

ォルトンは全く信頼出来るかもしれないのである。すなわち、ダンはオックスフォード大学とケンブリッジ大学で十代を過ごし、それから直ちに法學寮に行ったかもしれないのである。

しかしながら、ウォルトンはダンが若いとき、先ずイタリア、そしてスペインをその国々の文化を学んだり、言葉を修得したりして「何年間か」旅行したことも述べている。<sup>(10)</sup>ウォルトンの記述からダンの旅行は一五九七年に始まったことを示している。そんなことは有り得ない。なぜなら、一五九七年か一五九八年初めにダンはロンドンで仕事を始めたからである。さらに、それより以前に旅行したかもしれない。旅行したことを示す証拠はいくつかある。一つには、旅行家として当時の人々の間で評判であったらしいこと。もう一つは、その旅行についてかなり詳細であることである。ダンは元々イタリアから聖地へ行き、エルサレムと「救い主の墓」を見つもとりであったが、このことは達成できずその代わりスペインへ行った、というのである。後年、ダンは「残念がって」聖なる地を見ないでしまった、と時々言ったことをウォルトンは付け加えている。それは本当のように思える。もう一つの適切と思える証拠は現存する最も初期のダンの肖像画である。それはウィリアム・マーシヤルが彫板した中に残っており、一五九一年の日付けが付いている。肖像画を描かせた年令十八歳を示している。髪は長い巻き毛、生やしたばかりの口髪、十字架の形をしたイアリング、流行の肩幅の広いダブルレットを身につけている。剣をさげ、その人物になりきるためにその剣の飾りの柄をダンは、むしろぎこちなく抑えている。その肖像画にはスペイン語のモットーがついている。「アンテスマエルト ケムダド」(変節よりは早い死を)。

さて十六世紀後半のオックスフォード、ケンブリッジ両大学当局

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

は新しいスタイルの大学生たちが学者というより宮廷人のように見え、凝ったタイトと細身の剣を楽しんでいる、と不満を言っていたのは本当である。<sup>(19)</sup> もしもダンの肖像画がケンブリッジ大学から来たばかりの青年のものであれば、それはただ彼らの不満を裏書きしていることになる。しかし、全く自然にスペイン語のモットーとそのスペイン帰りの押しつけがましい絵の雰囲気は何人かの人々に絵がウォールトンによつて話題になっている大陸旅行から最近帰国した一若者を描写していることを暗示している。きつとダンのケンブリッジ大学滞在はウォールトンが信じていたより短かく、海外で過ごした年数は一五八九年から九十年であつたのだろう。正確な期間がどうであれ、ダンがわが身を捧げるために選んだ宗教はもちろんカトリック教であつた。彼は迫害と孤立した偏屈な信仰からのがれ、彼のカトリック教信仰の故郷イタリアを訪問したのだつた。この角度から見ると、その肖像画の挑戦的モットー、ダンが身につけている十字架、そして戦う構えはもつと深い意味を持つているかもしれない。それらは古い宗教に対する彼の忠誠心の遠慮のない主張であるかもしれない。まさにモットーの言葉は傲慢な態度として見ることが出来る。むしろウィリアム・シンプソンが述べているように、まるで現代のアメリカ人が、ロシア語でモットーを掲げるみたいである。<sup>(20)</sup> というのは、普通の英国の人々にとってスペインはいぜん大いなる敵だつただのだから。

ダンの肖像画の意味についてのこの推測が正しいとすると、変節するより死んだ方がよいのかどうかを知る好機がすぐに訪れた。法学寮は、ダンと弟のヘンリーが行つたところであるが、現代の単なる法律家養成所ではなかつた。当時の人々は法学寮を「英国の第三の大学」と呼んだ。しかし、それさえ間違つた印象を与える。とい

うのは、実際には決まつた授業料は無かつたのである。事実、法学寮は宿泊クラブかホテルのように開いていて、大都會の教養を身につけたい裕福な若者たちを泊めていたのである。少なくとも学生の四分の三が貴族の出身だつた。大部分は法律を職業にしようとするつもりはなかつた。彼らは専門的な資格を求めている貧乏な学生を軽蔑し、積極的に洗練された貴族の振る舞いを取り入れて自分たちを職業的法律家たちと区別した。彼らは詩を書くにも半ば道楽であつたし、酒宴や仮面劇をするのを楽しみにしていた。そんなことで宮廷生活に触れている気分になつた。<sup>(21)</sup> これらの才能溢れる人々の間でダンはすぐに一目置かれる指導者となつた。大勢の支配階級の子弟たちが法学寮に集つていたから、カトリック教宣教師たちにとっては標的であつた。法学寮当局は不信の念を持つて学生たちを見た。リンカーン法学寮は司祭の隠れ家として悪名高かつた。司祭たちは学生たちを招集するために特別ラツパを吹き、ミサをしたと言われている。ダン兄弟はウォールトンの記述が明らかにしているようにカトリック教徒たちに依然として教育を受けていた。母は家庭教師を頼んで数学と「他の教養科目」を子供たちに教えてもらつていたし、また、「ローマ・カトリック教会の特別の教義」を特訓してもらつていた。カトリック教への改宗者たちにはダン兄弟が役に立つ連絡相手に思えたにちがいない。

その現実の立場に反してダンを育てあげたのが法学寮でのこの生活の側面であつた。一五九三年の五月にウィリアム・ハリントンと言う若者がヘンリー・ダンの部屋でカトリック教の司祭である疑いで逮捕された。もちろん、ヘンリーも監禁された。有罪となつたハリントンは自分が司祭であることを否定したが、可哀相にヘンリーは拷問にあつて、彼を裏切つてしまつた。ハリントンが部屋に滞在

したとき、懺悔を聞いてくれたことを認めた。ハリントン は実際にヨークシャーの父の家で十五歳の少年のとき召命を受け入れた。ヨークシャーで彼はエドモンド・キャンピオンに出会って、薫陶を受けた。彼はドゥエイ、リームズのカトリック教系大学で教育を受け、トゥルネーの修練院でイエズス会士となる訓練を受けていた。他のカトリック教殉教者たちのように彼は陪審による裁判を受けることを拒否した。彼の破滅の罪の中に必要以上の人々を巻き込みたくなかったからである。彼は宣告を受けて一五九四年二月十八日に死刑に処せられた。手押し車の中で首にロープが巻かれたまま、「愛する同胞」に演説し始めた。ただトップクリフが厭味を言つて中断させただけだった。しかし、彼の勇氣は挫けず、トップクリフを断頭台から「悪逆非道の馬鹿者め」と勇敢に非難した。バビントン陰謀事件の共謀者たちのように、彼は生きたまま腸を引き出された。ストウは記録しているが、彼は吊るされ、切り落とされたあと自分にナイフを使おうとした死刑執行人と「争つた」。

ヘンリー・ダンは、承知の上で司祭を匿つたと言う理由で重罪だった。しかし彼は裁判にかかるほど長く生きてはいなかった。最初クリンク監獄に投獄され、ニューゲイト監獄に移された。そこで疫病が蔓延していて、数日の内に死んでしまった。ダンにとつて、弟の死は悲しみだけでなく苦痛をもたらした。ヘンリーと血族関係にあつたため、彼自身の宗教活動は今や詮索を受けることになつた。明らかに深刻な思潮の時代になつていた。その上、今彼は二十一歳であつたし、父親の遺産の分け前を受け取つていた。それは母親とカトリック教徒の助言者から独立するのに十分な金額だった。彼に直面するデイレンマは深刻だった。もし彼がカトリック教信仰に真実でありつづけければ、この世での昇進と成功の機会は消えてしまう

であろう。さらに彼の家族が切つても切れないほどに親密であつたイエズス会士たちの目指すところは中立のままでいることを難しくするであろう。その使命の中で助けなければという重圧感が彼にのしかかつてくる。もしもカトリック教に従えば、弟ヘンリーの運命を共にしないで、どれほど持ちこたえるだろうか。

もう一方で、もし彼が背教者になるとしても、カトリック教会が確信をもつて予言したその結果があまりに酷かつたので、ダンの時代以来ほとんどの人々がもはや簡単にそれを信じることを拒否してゐた。彼の世代を別にすれば、永遠の天罰はぜんぜん神話ではなかつた。彼らは地獄の炉の上を歩く人々のようであり、何時いかなるときも、炎の中に落ちてしまうかもしれない薄い皮膜で地獄の炉から隔たてられた存在だった。ダンが後に書いたように、落ちて行く「突然の恐怖の瞬間」があり、そして永遠の地獄の火がある。ダンが信じていた悪魔でさえ、このような状況では呪われた魂と場所を取り替えるかもしれない。なぜなら、その拷問は悪魔のより恐ろしかったからである。

もちろん他の大勢の若いカトリック教徒たちは、今ダンの前に立ちほだかつているような状況を受け入れるように強制されてきたし、はつきりと幻滅を感じて、その二者択一を外観してゐた。神と神の真実に忠実でありつづけるのか、それとも地獄の火の中になつてかさまに偽証の魂を送るのか。この選択は「永遠がよつて立つ」その「恐ろしい瞬間」であつたと、ロバート・サズウェルは書いた。ダンはたぶんサズウェルに会つたことがあるし、この記述がなされた彼の『祈禱』を読んでゐたであろう。事の重大さに恐怖するサズウェルの言葉はダンの精神を貫いたように思える。後年、ある説教の終り近くで会衆を目覚めさせようとしてダンは、サズウェルの言葉を

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

響かせる。会衆に呪われた魂の永劫の苦しみ、そこに到った決心の瞬間を思い起こさせる。「その永遠はこの一瞬に掛かっている」。

たぶん私たちは単にその響きを想像しているに過ぎないのである。しかし、ダンが神の選びについて苦悩していることは全く間違いない。そして地獄を選んだ。言い換えれば、彼はカトリック教の神を棄てたのであり、棄教するとき、ダン は地獄に落ちたのだ、と信じる四世紀後のカトリック教徒がまだいる。カトリック教徒の代弁者が断言するように、ダンは「全く破廉恥な」類の背教者であった。「殉教者たちの近い親族を、自分の食い扶持のゆえに悪口を言った」。十分承知の上で、ダンはカトリック教の信仰に反して死に至る罪を犯した。私たちが聞き及んでいるように、彼の殉教した親類縁者の祈りが死の床にある痛悔の恩寵を彼のために勝ち得たのだ、と期待されるかもしれないが、「私たちの知る限りでは、彼は背教者として死んだのであり、何の悔い改めもなかったのだ」。もし私たちがこの種の事柄を原始的迷信だと切捨ててしまうなら、私たちはそれがダンの家族やダンの一族にどのように見え、また、彼の絶望の雰囲気の中で、ダン自身にどの様に見えるかに違いないかを理解することが出来なくなってしまうであろう。

彼の背教は急でも突然でもなかった。カトリック教会と改革派教会の間の論争点は繰り返し敵対する聖職者たちに記録されてきた。全体の論争を通して聖職に就こうとしたのは、いかにもダンの書物好きらしい結果である。一方では、彼が言うように宗教について寛容な精神を持っていて、この事が「醜聞の数々を生んだのだった」。なぜなら、知人たちはダンが全く宗教を持っていないのではないかと疑うようになったからである。彼が主張するように、なお論争する神学者の間で神を求めることと「神学体系を研究し要約する」ま

ではいかなる結論も出さないことが「英国国教会とローマ・カトリック教会との間で論争されてきた」。ウォールトンは記録しているが、死についてのダンの論文の間にあつて、一、四〇〇の著者からの引用文が見出された。「その大部分はダン自身の手で要約され、分析されている」。

この危機を表す詩作品の中の証拠は、ダンの青年期の初期の頃の偉大で、重要な詩『諷刺詩三』である。大部分その長さの故に全く諷刺詩ではないが、あらゆる思想家が直面すると言つてもよいほどの、人が生活の中で経験するその瞬間の自己分裂の記録である。そのとき、若者の信仰は疑いもなく同化され、私たちの最も近い個人的献身に結び合わされ、成熟した知識人の懐疑主義との葛藤に入っていく。その詩は苦悶と嘲りの疾風の中で始まる。涙を抑え、同時に嘲りの笑いを呑み込む。

(好意を持つてくれる) 自然な哀れみの情がぼくの嘲りを息苦しくする。

激しい嘲笑はぼくの臉を腫らすあの涙がでるのを禁じるから。罪を嘲ることも、罪を涙で嘆いてもいけない……

ダンは怒りの中に安らぎを求める。だから彼のような若者たちが自分たちのエネルギーを無駄にしているセックスや言い争いや冒険などの暇つぶしを弾劾する。それが特徴的な叫びとなる。私たちが知るように、彼はいつも自分が集中してなかったり、目的がないと感じることで落胆した。到る所にあるこの初期の旋律。詩がその一つの主題に落ち着いている。ダンが断言するように、そこに落ち着く価値はある。それが「真の宗教を捜し求めよ」である。彼が知る限

り、カトリックか、またはプロテスタントかを信奉する正当な理由は、痛ましいほどに不十分である。人々は古いとか、新しいとか意味もなく好き嫌いを言ったり、名づけ親たちが言うことを受け入れたり、選ぶことすらやめて無感動になつたりする。自分で事柄を考え出す代わりに、ローマ教皇か、何処かの権威に縋つたり、プロテスタントであれば、英国国王というところであろうか。

愚かで哀れな人よ、きみの魂を人間なんかの法律に縛りつけようとするのか。そんなもので魂が最後の審判の日に裁かれるのでは無いのに。それならフィリップ二世とか、教皇グレゴリーとか、ヘンリー八世とか、ルターとかがこう言つたなどと言うことが役に立つのか。このような弁明が解決不可能な対立に対して平等に力を持っているか。双方の側が正しいことなどありはしない。

ダン以前に誰も緊迫した情熱的な弁明をこんな風に堂々と力強く残す英語の詩を書いた人はいなかった。詩行を揺さぶるもの、すなわちその全体の詩が地獄の恐怖である。ダンが警告する「悪辣な悪魔」は魂を奪おうと待ち構えている。逃れる道はただ一つ、一所懸命考へることである。

ごつごつして険しい巨大な丘の上に、  
真理は建つ。真理に到達しようとする者はぐるぐる回つて進まねばならない。その丘の急な坂が阻んでいるものを征服しなければならぬ。しかも、年老いて死の黄昏が訪れ、きみの魂が休息する前に努力しなければならぬ。というのは、

そんな夜には誰も働けないから。

休息すると遅くなつてしまう。それゆえ、今、行動せよ。

骨の折れる行いは肉体の苦勞が達成する。一所懸命考へることも精神の努力が達成するのだから

この有名な詩行は、そこでダンが真理の丘という伝統的なイメージを独自の激しい模倣のリズムに移し変えてはいるが、正当な古典の地位を確保している。しかし、詩の中でダンが到る所で述べていることとこの詩行のどちらかといえば噛み合わない関係は今まで記述されてこなかった。最初に若者の無責任さを叱責するとき、ダンは親の範に従うべきことを強調した。それを無視した者は、キリストの来臨前に死んだ徳ある異教徒たちより悪い状態にあることを知るかもしれない、とダンには注意を促した。

きみの父の靈はその厳格な生活

の功績により信仰に帰せられるかもしれない、天国のキリスト以前の哲人たちに会うであろうか。また父に従うべき易しい近い道を教えてもらったきみが地獄に落ちているのを聞くであろうか。

ダンが詩のこの箇所ですべての宗教を選ぶことよりもむしろ道徳的行為に関わりを持つているのは本当である。それにも係わらず、その父親から手に入れる救いへの「易しい道」があるという前提と救いは個人が自分のために勝ち取らなければならない「確固たる知識」によるという主張との間の一貫性の欠如が目立つ。並べて置くことで、引用した詩行は独立した大人と受け継ぐべき信仰への忠誠心と



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

の間の葛藤を示している。そこからその詩のあらゆる情熱と苛立ちが出てきている。「きみの父の霊」という句は特別な響きを持つ。私たちはその句で『ハムレット』の亡霊の演説「わしはお前の父の霊なのだ」を連想するからである。この句を私たちの頭から追い出すことは難しい。たぶん私たちはそんなことはすべきでない。『ハムレット』の初版は一五八九年まで演じられていたし、ダンがそれを繰り返し返しているかもしれないから。父ハムレットが死んで、忽ちに継父が取って変わったようにダン自身の父について同じように考えていたのだろうか。父親が死んだとき四歳にもなっていないから、父親についての記憶は覚えていたとしてもぼんやりしていたに違いない。しかし、そのことがその句を台無しにしているという必要はないであろう。かなり経ってから、母親に宛てた手紙の中でダンは「ぼくの最も親愛なる慎ましい父の愛と悲しみ」を思い起こして、「ぼくは父の魂が以来ずうと我らの栄光の救い主のみ姿にありまみえることを望みます」と書いた。『ホーリー・ソネット』を生み出した精神的危機の間、彼の葛藤を父の霊が見守ってくれるのだという思いが確かに彼の心に入ってきた。

もし忠実な魂が同様に天使のごとく

栄光を受けるのなら、そのとき、我が父の魂はこのことを

見て、完全な至福にさえ加えるので、

勇敢にも我、地獄の大口を乗り越える。<sup>(30)</sup>

それを読めば、『諷刺詩三』でダンが宗教と神父たちについて書くとき、自分自身の父親のことを少しも考えないで書いているとは信じ難い。その父親の宗教を棄てようとしているのだから。彼の父はカ

トリック教徒であったし、父が教えた「易しく近い道」がローマ・カトリック教への道であった。彼の父が天国にいることを推測し、『諷刺詩三』が天国へと導く唯一の真実な宗教があると言い張るから、その詩の議論は始まらないうちに終わってしまうように思えるであろう。真理の丘に苦勞して登り始める必要はない。カトリック教が正しくなければならぬから。この様に見ると、ダンのより深い情緒的な忠誠心から出てくる詩の部分と勇敢で新しい探究心が示す部分との対比は鋭くなる。十五年位後で書かれた散文記述の中で、ダンにはカトリック教から自由になりきれず、耐えなければという頭の中と心の中の葛藤をより冷静な言葉で書き表すことになった。

わたしは他の沢山の人達よりしなければならぬ長年にわたる仕事があった。というのは、先ずローマ・カトリック教の確かな痕跡を消し去ることとその模範と論拠の両方と戦うことがあったからである。そのことがある威力を發揮していたのだ。そして予測できる幾つかのことが、初めにわたしの意識を固めたのである。それは三位一体の神と神に従う人々によつたのである。神は本来がわたしの意志を超えた権威ある超越者であり、神に従う者たちは学問と善き生活によりこれらの事柄の中でわたしの理解を導き、修正するように興味を持たせてくれるように思われた。<sup>(31)</sup>

ここで、時代がダンの背信を追い越したのである。彼の言うことが客観的に聞こえるようになる。彼は切り離さねばならない個人的絆について、また昔、賞讃してやまなかつたその生活と精神の持主に失望したと言う意識についても、今やおおっぴらに話すことができ

る。その危機の中で書かれた諷刺詩の中では、これらの側面はあまりに苦痛が大きすぎて述べることは出来ず、抑えなければならなかった。死んだ父に対する遠回しで不確かな言及の中でのみ、私たちはダンが自ら戦っているある種の内面の心の動きについて知るのである。家族や友人についての言及は何もない。その詩が目指しているのは宗教を選ぶことが純粹に知的仕事であり、山登りのごとく情緒的なことではない。ダンはこのことについて彼の個人的混乱を鎮めるため自ら確信を持つ必要があった。だから、諷刺詩は危機の記述ではなく、危機の適切な意味を表す部分である。それは著者にとって必要な詩であり、その矛盾と虚偽の陳述はその力強い生活の部分である。

ダンは結局のところ英国国教会の教えを受け入れるようになったけれど、英国国教会の中で一つの真実な教会を見出して、その外側には救いは無いなどとは決して信じることは出来なかった。そんな風に考えたなら、自分自身の家族を地獄に落とすことになったであろうから。その代わり、救われる者はあらゆる教会から来るであろう、と自らを納得させた。「東方正教会から、西方正教会からも、ギリシヤ正教会からまたローマ・カトリック教会からも、そして（神の恩寵により）ローマ・カトリック教会の中にはない祈る教会からも」<sup>(32)</sup>。これは彼がしばしば手紙と説教で繰り返す意見である。しかし『諷刺詩三』を書いた気性の激しい若い詩人であってみれば、それが耐えがたくとも寛容であると見ていたであろう。事実、彼を選んだ標的の一つである。

グラッカスときたら平等に一人ひとりの女性を愛し、様々に異なった国々で女性が異なった服装で行き来してもなお女性

に変わりないように宗教もそれと同じのだと考えている。そんな風に目が見えなくなるのはあまりにも多くの光のためである。しかし、必然的に、きみは真実な唯一の宗教を認め、武力の下でも他のいかなるものも許してはならぬ。<sup>(33)</sup>

ここではカトリック教徒が顔を出している。なぜなら、この諷刺詩の中で、ダンは自分のカトリック信仰をいそがしく脱ぎ捨てようとしているものの、救いを保証する唯一の「正しい」教会があるという確信は、彼がカトリック教で育った名残りだからである。いかなる教会も決して再び彼にそれ程の意味を持つことはないであろうし、結局、カトリックを捨てたとき、かけがえのない絶対性を失った。

ダンが英国国教会の聖職者になってすでに三年経ったとき書くことになるように、カトリック教徒であったなら「愛するキリストよ、それほどに輝かしい、明解なあなたの配偶者たる教会をわたしに示したまえ」<sup>(34)</sup>などとは書くことが出来なかったであろう。この多くの論争を引き起こしたソネットについて重要なことは、その中でダンが真実の教会の幻を見せてくれるように求めているが、英国国教会へのいかなる「不誠実」をも意味するものではなく、彼の背信が残した継続している方向感覚の消失を示している。カトリック教徒であったなら、知っているから尋ねる必要はなかったであろう。

英国国教会信徒としてダンは意識的に一つの「正しい」教会を求め、信仰を諦めたけれど、彼の肝心な部分にはカトリック教の子供時代に教え込まれたので、なおそのことに執着した。このことは、彼の説教の中で喜劇的な矛盾と言ってもよいものへと導かれていく。すなわちここでは、他の宗派の人たちに向かつての聖人のような寛大さが、カトリック教徒と教会分離派に対して痛烈な非難を込めた

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

説教となつて同時に存在する。彼が会衆に話すように、私たちは私たち以外のどんな意見も聖礼典のような事柄に関して真実であるはずがないと想像するのは注意すべきである。しかし、幾つかの段落の中で、彼は「異端的判じ物」と「悪魔の詭弁」としての全質変化説を公然と非難している。<sup>(63)</sup>カトリック教聖職者がホモに成りやすい傾向は、ダンが激昂したときに論ずるのを好むもう一つの主題である。<sup>(64)</sup>私たちが見てきたように、彼は救われた者は全ての教会からやって来るかもしれないと宣言するけれど、彼の言っていることは「新しい霊的な病氣」<sup>(65)</sup>としての宗教的な寛容を記述している際に見出すことができる。

これらの混乱は、私たちにダンの衝突する個性の中の二つの要素を示してくれる。一方では、単純で全てを凌いでいるという見方に対する欲求であり、それと意見の違う人たちを中傷する必要がある。彼のこの部分は、もちろん彼の諷刺詩の中と数編の恋愛詩の中で顕著である。たとえば、『比較』を見てみよう。その中で彼自身の恋人の完全さが他の恋人の下品な変形で対比される。しかし、別の面では、家族の同情の他に、ダンの着想の世界でしばしば出くわす調和と同化への衝動があり、そのために彼は自らを抑制するのである。従つて、彼は二つの態度のあいだを行きつ戻りつする。

ダンが何時カトリック教を棄てたのかは知られていないし、ある特定の日とか週を指摘することを望むのは馬鹿げたことであろう。『諷刺詩三』は、私たちが見てきたように、彼が古いカトリック教信仰から彼の知性を探り出すことができたことを示している。そうでなければ、真理の探究の旅に出発する必要は無いであろう。彼が一五九七年に国璽尚書エジャートンの秘書になったとき、英国国教会信徒になりすます用意ができたにちがいない。エジャートン自身

が背教者で、カトリック教徒を迫害する者に味方して、数人の殉教者たちを迫害した。その中にエドモンド・キャンピオンがいた。<sup>(66)</sup>彼がダンの背信に同情するのは自然なことであろう。

何故ダンが背教者になったか。それを答えるために、私たちは人間の動機の根源を推し量ることができ、それを確信しなければならぬ。しかし、三つの可能な理由がそれぞれに示している。すなわち彼には野心があったこと、学識があったこと、彼が子供として年長者や先生たちに感じていた愛情と賞賛に対してありきたりとも言える仕方で反抗していたことである。順繰りにこれらを取り上げてみると、先ず彼の野心。これはこの本の第三章の主題になる。しかし、ここで触れる必要がある。なぜならそのことで彼がローマ・カトリック教を棄てるだけでなく、教皇と英国国王との間の忠誠心の中でお揺れ動いているカトリック教徒を攻撃することになったからである。彼は戦闘的英国国教会信徒として自分を英国のいたるところに示す手段を講じて、公然とカトリック教信仰のために断頭台に行つたある勇敢なカトリック教徒たちをすすんで辱めた。

一六一〇年に彼は『似而非殉教者』という作品を出版した。それは英国カトリック教徒が英国国王ジェームズに「忠誠の誓い」をすべきか、すべきでないかの論争に貢献した。「忠誠の誓い」は単に関係のある人に殺人を犯しませんという保証を要求しただけなので、それはかなり理にかなつた文書であつた。カトリック教徒は自分が邪悪で異教的であるとして、ローマ教皇が破門し、拒否した王たちがその臣民に退けられたり殺されるかもしれないという、この忌まわしい教義と立場を「心から嫌悪し、憎み、公然と敬遠すること」<sup>(67)</sup>を誓わなければならなかつた。しかしながら、この頃爆薬陰謀事件が物語つていのように、共に異なつた信念を持っていた何人かのカト

リック教徒ともつと平和的な英国教忌避者でさえ、その「忠誠の誓い」の言葉が不快であると見ていた。ジェームズ一世自身はその事柄に強い関心を持っていて「忠誠の誓いの弁明」を一六〇七年に出版していた。それをイエズス会士である反対者たちは擲揄した。

この公然の嘲りに激怒した王は一六〇八年から九年の冬のあいだ他の仕事を投げうって、訂正文と長く新しい序をつけた「弁明」を再刊した。ジェームズ一世の顧問官たちは、特に重要な案件が無視されていたのでこの文書活動に飽き飽きしていた。ヴェニス大使は王への彼らの献身振りがぎこちなくなっていると報告した。<sup>(40)</sup> ダンの『似而非殉教者』はカトリック教徒が「忠誠の誓い」をすべきであり、しなければならぬと論じている。彼の作品が印刷されるやいなや、彼はいそいでロイストンへ行った。そこにジェームズ一世が滞在していた、確かに王に一冊献上した。それはよく考え抜いての行動だった。なぜなら英国の公的政策を支持し、窮地にあつたジェームズ一世の統治をたすけることになり、彼は戦術的論争家として登場することができたからである。その本は相当な脚光を浴び、ダンの評判をいやが上にも高めた。オックスフォード大学から名誉修士号を与えられ、カンタベリー聖堂の首席司祭は、ダンに惚れ込むあまりダンとペーコンを並べて現代思想家である、と述べた。カトリック教徒は激怒し、ダンを「この上なき悪意を持ったもの」として、告発しダンの「神の聖者と僕たちに対する冒瀆的かつ無神論的冗談」<sup>(41)</sup>を深く嘆いた。

ダンが『似而非殉教者』を書いたとき、我が身の栄達に関心があつたので本当に考えていたことを抑えていたのか。密かに英国政府の意見と一致するように自分の意見を合わせたのか。たぶん、一面で彼が論じている事柄は彼の気持ちに近かつたであらうけれども。

私たちが注目してきたように、ダンはローマ・カトリック教の陣営にいる屈指の戦士たちを本気で怒らせてしまった。あきらかにイエズス会士たちである。彼らは忠実な英国国民であり、なおかつ善良なカトリック教徒であることは不可能であると主張していたのである。イエズス会士たちの非妥協的態度はダンが自ら信ずる神に忠実で有り続けながら、世俗的才能や野心のいかなる出口をも拒まれていくということ、実質的にダン自身の背教を強化してしまつた。だがダンはいエズス会士の血縁の出なのである。さらにダンはあまりにも多くの心痛や心の混乱を自らの家族の人、同信の者たちの間に見てきたから、過激な者たちが責任を負うべきことがたくさんあると感じてしまふのだつた。彼が英国カトリック教徒にイエズス会を棄てて、「忠誠の誓い」を受け入れて、自らの生活を保証せよ、と奨めるとき憤りだけではなく哀れみが彼の心をうごかした。

しかし、もし『似而非殉教者』が正確にこの点でダンの見解を代表しているならば、他の作品の中では世論に迎合している徴候を示すことになる。というのは、まさにその前の年に、彼は「忠誠の誓い」について友人グッドイヤーに用心深い手紙を書いていた。その中で、ぼくが見るかぎり、両方に正当性がある、と述べている。明らかに彼は、英国政府がその誓いなしには安全だと感じられないことを、認めている。しかし、他方でローマ・カトリック教会が要求する主権は、その誓いを立てることを許せば、目に見えて衰えてしまふ。さらに、カトリック教会の主権についての主張は、ダンにとつてジェームズ一世のような王が持つ同様の主張と正に同じ基盤を持つていると思われる、と言っている。なぜなら、両方とも、実際のところ全くの任意であるからである。<sup>(42)</sup> ダンが数ヵ月後に『似而非殉教者』の中で提示することになる国王の主権の強行な擁護につい

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ての言及はこの個人的手紙の中に一つもない。

『似而非殉教者』が主張するように、国王の権威は神によって人間に課せられたのである。「神は一つの力で、あらゆる国を無力にする。一人の人を遣わし、あらゆる人を無力にするように」。「忠誠の誓い」を立てることを拒否することは、それゆえに単に政治的なことではなく、「自然の法則」に逆らうことなのである。それはまた、正道を踏み外してもいる。すなわち、拒否する者は、心ひそかに、従うことが道理にかなうことを知らねばならない。なぜなら「神は直接人間の自然と理性に入り込んでいて、人間から満ちてくる力を必要とする」からである。自分たちの信仰に真実であり続けることで殉教を得ようとするカトリック教徒はどうかといえば、「自然の法則によって避けることの出来る危険に自らを陥れる人間はいないかもしれない」という理由で同様に「自然の法則」を廃棄している。殉教者ではなく、似而非殉教者なのである。

ダンがこの迷信と確信の入り混じったものを押し進めたとき、それがまたとも都合よくジェームズ一世の聖なる国王の権利についての理論と相まったのだが、精々のところ、彼の精神の半分を使っていただけだった。というのは、個人的には彼の「自然の法則」についての意見はかなり懐疑的であって、私たちは『似而非殉教者』のおそらく一、二年以内に書かれた『自殺論』の論文から知ることが出来るからである。「この自然の法則という言葉は」とダンがそこで書いている。「非常に様々で一定せずに述べられているので、告白すれば、私自身が以前それを理解しようとして百回読んだ」。「自然」はダンが理解するとおり、この世の中でおこる全てのことを包み込むために人々が簡単に使う言葉である。だから、実際に起こっていることが「自然の法則」に反していることがあり得るのだと提

示することは無意味になる。ダンには殉教者のように避けられる危険に身を任せることは「不自然」であると信じることからほど遠いので、彼は『自殺論』の中で自らを殺すことを選ぶ自然らしさを支持しているのである。だから『似而非殉教者』が妥当と不正直の産物のように読める。ダンが事柄を単純化したのは、正に彼がジェームズ一世に上手く取り入ろうとしたことと普通の英国のカトリック教徒に心から同情したことによるのである。ダンには事柄が複雑なことを知っていたのであるから。

彼の背教に対する動機のように野心にもある。第二に、私が述べてきたように、ダンはずば抜けて頭がよかつたし、そのことはまた、カトリック教主義に彼が心を奪われない一因でもなっていたように思える。ローマ・カトリック教会の迷信、それと奇蹟物語は、その中で作者たちが聖人たちの生活を特別扱いしているけれど、ダンには理性的人間の尊厳にも値しないものとして映った。敵対するカトリック教徒たちの怒りに向けて、ダンには『似而非殉教者』をこれらの馬鹿げた例証で一杯にした。それらは御墨付でカトリック教当局から入念に収集され、学術的注釈が完備している。聖アントニオは、頭を水面に出して聞いたという魚たちにもどのように説教をしたのか。説教の終わりに、どのような魚は話しをし、また別の魚はお辞儀をしたりしたのか。母親を蹴つ飛ばしてしまいました、と一人の告解者が告白したとき、その聖人はどのように「もしお前の足がお前をだめにするなら、切つて棄てよ」と答えたのか。するとその男は自分の足を切断したが、聖アントニオは再びそれをつけるために思慮深い奇蹟を行った。家禽をたべる食欲をたしなめるため、アンデレと言う修道士はどのように十字架をつくり、鳥たちに逃げるように命じたのか。鳥たちは焼かれてしまったというのに。

同様に、カトリック教がその信徒たちから引き出す盲信的服従は、ダンの知性には鼻持ちならなかった。これはイエズス会士たちが特に「執心であつた事柄だつた。「我々はいつも」と聖イグナティウスは書いた。「聖職階級制に立つ教会がそう規定するなら、白と思われ、御墨付を貰つてゐるカトリック教の著者が敬意をはらつて引用してゐるのだが、『似而非殉教者』の中で聖別された野暮な行為についての騒がしい武勇伝へとまとめられてゐる。聖フランシスの信者の一人は、私たちが知るように、地面に逆さに植物を植えた。というのは、その聖人がそれが正しい手順だ、とその男に忠告したからだという。また、幼子のごとき者のみが天国に入ることができるといふことを思い出した別の男は、よちよちあるきのようにふらふらと歩き回りはじめた。特別に熱心な信者が、枯れた枝を植えて、彼の大修道院長の命令で一日に二回、二マイル離れた所から水を取りに行き、水遣りをした。

しかし、ダンが馬鹿にして一笑にふそうとしてゐることが、良くみると、いつも見下げてゐるばかりとは限らない。彼はゴンザガの行為を馬鹿げた例証の中で取り上げている。彼は疫病が発生したと聞くと感染した人を訪れるために修道院に入った、<sup>(48)</sup>という。ここでダンが揶揄してゐるのはカトリック教徒というより自分自身についての事柄を述べてゐるのである。彼が冗談の的にしたカトリック教の権威が懸命に育て上げてゐる純粋な信仰だけでなく、自己犠牲がいかに彼の戦闘的で、批判的な性質に程遠いかを私たちは理解する。彼には知性の強さと共に、限界もあつたのである。

ダンをカトリック教主義から切り離れたと論述できる第三の動機に関して——少年のときに敬虔であることを教えてくれた人々に對

する反発——このことは『似而非殉教者』の一年後に出版された「イグナティウスの秘密会議」という題の本に最も詳しく見いだされる。最も難解な種類のイエズス会士に対する諷刺であり、ダンの家族を災難に巻き込んでしまつたその敬虔なテロリストたちを英国だけではなくヨーロッパも大笑いするように、ラテン語で出版した。地獄での論争の形式をとつていて、その中で聖イグナティウス・ロヨラはイエズス会修道会の創始者で、たぐさんの反論する原告コペルニクス、パラセルサス、マキアヴェリそれにクリストファー・コロムブスが含まれてゐるが、彼らに對して地獄で卓越性に対する権利を弁護してゐる。彼らは地球を粉碎する革新性と邪悪さの権利を主張するが、戦う聖人により論破される。彼が上手に主張するように、彼と彼のイエズス会士たちは、悪魔自身を除いて他のいかなる創造物よりさらに悪意を持つてこの世を大混乱に陥れてゐる。そして、事実その悪魔は聖イグナティウスの啓示であまりにもぞつとさせられてしまい、ロヨラがそこで留まるべき地獄の王国としてすぐに乗っ取るのではないかと恐れてゐる。したがつて、彼はイグナティウスとイエズス会士たちを月にある新しい地獄へと送ろうとする。

ダンがイエズス会士たちに對して主張するたぐさんの罪状は集団虐殺から男色にいたるまでである。スペイン軍が新世界アメリカの土着住民を二十万人から百五十人まで人口を減らしたほどに殺戮したのは、まさにイエズス会の忠告によつたのであることをダンが主張してゐる。性道徳に関して、この地球での教皇の登録の目的はカトリック教会の聖職者たちの男色を確保するためである。とダンは断言してゐる。彼らの欲望はあまりにも無節操になつてしまつていて教皇パウロ三世の息子である枢機卿は実際に司教を凌辱してしまつた。「彼の胃袋は」とダンは喜々として報告してゐる。

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

若い髭のない少年たちに向かつていたのではなく、未熟な果実にでもない。なぜなら自分が正常な性から程遠いことなど考えなかった。ただ男らしい、敬虔な、髭のあるヴィーナスがいただけだった。そこに留まってははずに、彼の滑稽な欲望はなおさらに進んでいった。そこで彼のヴィーナスはさらに怪物になり、彼は彼女を司教の職に囲うことになる。<sup>60</sup>

その話しは本当ではなかったようではあるが、ダンが創り出したのではない。それは、一般的に流布している反カトリック教の悪口から、彼が諷刺のために取り上げたいくつかの刺激の強い断片の一つであった。彼の説教はイエズス会修道会に対する嫌悪の陽動作戦を含んでいて、ときどき確かに厳しい家族の感情のように響くものを明らかにしている。「父として、主人として私はイエズス会士たちの企てから私の家族を守ることができる」と彼は宣言する。一人のイエズス会士を逃すことは狐か狼の命を助けるようなものである。<sup>61</sup>

ダンの詩と彼の背教を反映している道筋を見るべきときである。しかし、要約すれば、彼はローマ教会を棄てたけれど、ある意味で、その支配を逃れることは決してなかったことに気づくかもしれない。そのことは、彼の精神に恥辱あるいは恐れとして、あるいは彼が最終的には和解するかもしれないと望んだ敵として身近に残っていた。自分がカトリック教徒として育てられたことが永久に烙印を押されてしまったことと自分の精神が他のいかなる方向にも素直に育つことが出来ないことを彼は知っていた。後年、彼はしばしばキリスト教徒に一つの教会から他の教会に変わることに對する警告をした。そのことが必要でないのは、「全てキリストを告白する中に救いへの道があるのだ」から、と言った。教会を変えることで駄目にしてい

るのである。教会を変える人は、グッドイヤーに宛てて言ったように、表裏の像が削り取られた貨幣のようである。たとえこれがその貨幣に良質の鑄型を押しつけるように作られるとしても、それはいつも後で「振じれて、斜め」に見える。だから「様々の鑄型を受け入れた精神」<sup>62</sup>を考えてみなさい。彼は知る理由があった。さらに彼は彼らを迫害する側にいたけれど、彼は迫害されたカトリック教徒に同情していた。トップクリフとフィリップスのような政府のスパイや屠殺人たちのことを考えると彼の胃は煮えくり返らざるをえなかった。彼らはなお「宮廷の図書館」の中で彼の標的に含まれている。その本はたぶん一六一一年までその最後の形を受け入れていた。<sup>63</sup>小さいこの辛辣な諷刺は錆びたスタンガンのように火をふきだし、稀有なラテン語の本のカタログのように偽装されていて、言うこともないことだが、ダンの生存中には決して出版されなかった。それは反プロテスタントの調子が著しい。最終的にダンがキリスト教国の教会を再統一するための熱心な体系の代弁者であったことを知ることは、驚くにあたらない。彼は一六〇六年にヴェニスのプロテスタント主義とローマ・カトリック教の教皇制度との間の論争の中から多くを望んでいたし、温かくヴェニスの闘士パオロ・サルビを賞賛した。彼の「トレント公会議の歴史」は、一つの教会は英国国教会の方針に似せるものに沿って形成される必要があることを提案していたからである。<sup>64</sup>もちろん何もそこから出てこはなかった。しかし、ダンの熱心さは全体として理解できる。教会の中のその奪い合いを癒すことで、彼は自分自身を癒すことができたのである。

## 訳注

[1] ダンをカトリック教徒の視点から論じた本である。原題は『ジョン・ダン—生涯、精神、技法』であるが、『ジョン・ダン入門』とした。

## 原注

## 序

- (1) W. Milgate, 'The Early References to John Donne' *N & Q* 195 (1950), 229-31, 246-7, 290-2, 381-3, and *N & Q* 198 (1953), 421-4. \* 参照。
- (2) D. Masson, *Drummond of Hawthornden* (1873), 357.
- (3) See Frank J. Warnke, 'Marino and the English Metaphysicals, *Studies in the Renaissance* 2 (1955), 160-75. \* 参照。
- (4) Jonson i, 135.
- (5) Gosse i, 219.
- (6) C. S. Lewis, 'Donne and Love Poetry in the Seventeenth Century', in *Seventeenth-Century Studies Presented to Sir Herbert Grierson* (Oxford, 1938), 64-84.
- (7) Browning, 'Too Late', lines 141-4.
- (8) Barnabe Barnes, *Parthenophili and Parthenophe*, Sonnet 63.
- (9) Campion, *Works*, ed. P. Vivian (Oxford, 1909), 239.
- (10) Gosse ii, 68.
- (11) *Satires*, 66.
- (12) *Satires*, 107.
- (13) Yeats, 'Who Goes with Fergus?', line 12.
- (14) *Paradoxes*, 75.
- (15) Gosse, ii, 124.
- (16) *Sermons*, i, 179.
- (17) *Sermons*, iii, 68, 131; v, 120.
- (18) *Sermons*, iv, 301, vi, 283; vii, 157.
- (19) *Satires*, 13.
- (20) *Sermons*, v, 251.
- (21) *Elegies*, 24, 19.
- (22) *Divine Poems*, 30-1.
- (23) *Elegies*, 17.
- (24) *Sermons* vi, 231. (The editors have here, without authority, emended 'God' to 'Glod': see *Sermons* vi, 371.)
- (25) *Elegies*, 73.
- (26) *Sermons* i, 236.
- (27) *Sermons* v, 388; vi, 170 viii, 87, 97; vi 337, 269.
- (28) *Sermons* v, 266.
- (29) Lewis, op. cit., 68.
- (30) Simpson, 3.
- (31) T. S. Eliot, 'Rhyme and Reason: the Poetry of John Donne', *The Listener* 3 (19 Mar. 1930), 502-3.
- 第一輯 詩評
- (1) Bald, 26-34.
- (2) Bald D. Whitlock, 'The Heredity and Childhood of John Donne', *N & Q* 6 (1959), 257-62, 348-53.
- (3) *Pseudo-martyr*, 108.
- (4) Charles Hoole, *A New Discovery of the Old Art of Teaching Schoole*, ed. E. T. Campagnac (1913), 213.
- (5) カトリック教徒が見るカトリック教徒迫害についての私の根拠と



- Robert Southwell, *An Humble supplication to her Maestie*, ed. R. C. Bald (Cambridge, 1953): *John Gerard: The Autobiography of an Elizabethan*, trans. P. Caraman, with an Introduction by Graham Creene (2nd edn., 1956); and *William Weston: The Autobiography of an Elizabethan*, trans. P. Caraman, with a Foreword by Evelyn Waugh (1955).
- (9) A. G. Smith, *The Babington Plot* (1936), 212, 239-42.
- (10) Richard Challoner, *Memoirs of Missionary Priests*, ed. J. H. Pollen, S. J. (1924), 224-5 and *passim*.
- (11) Simpson, 45, 316, 319.
- (12) *Elegies*, 8-9.
- (13) *Pseudo-Martyr*, 222.
- (14) Whitlock, op. cit., 257-62.
- (15) On Ellis and Jasper Heywood, see Bald, 25-6 and 39-45.
- (16) *Pseudo-Martyr*, 46.
- (17) However, Southwell, *Humble Supplication* (see n. 5 above), 70-80.
- (18) *Elegies*, 8.
- (19) *Balthamos*, 17.
- (20) *Weston: Autobiography* (see n. 5 above), 148-50, 178-84.
- (21) Bald, 50-2; John Sparrow, 'The Date of Donne's Travels', in *A Garland for John Donne, 1613-1931*, ed. T. J. Spencer (Cambridge, Mass., 1931), 123-51; and Baird D. Whitlock, 'Donne's University Years', *English Studies* 43 (1962), 1-20.
- (22) Mark H. Curtis, *Oxford and Cambridge in Transition, 1558-1642* (Oxford, 1959), 54-5.
- (23) William Empson, 'Donne and the Rhetorical Tradition', *Kennyon Review* 11 (1949), 585.
- (24) Wilfred R. Prest, *The Inns of Court under Elizabeth I and the Early Stuarts, 1590-1640* (1972).
- (25) Bald, 58; J. Morris, 'The Martyrdom of William Harrington', *The Month* 20 (1874), 411-23.
- (26) *Sermons ii*, 239.
- (27) *Sermons viii*, 107.
- (28) Southwell, *Humble Supplication* (see n. 5 above), 27; and *Sermons vii*, 368.
- (29) H. F. G. Rope, 'The Real John Donne', *Irish Monthly* 82-3 (1954), 229-34.
- (30) *Satires*, 10-14.
- (31) Peter Alexander, *Shakespeare* (1964), 212-20.
- (32) Bald, 36.
- (33) *Divine Poems*, 14.
- (34) *Pseudo-Martyr*, sigs. B2v-B3r.
- (35) *Sermons vi*, 163.
- (36) *Satires*, 12-13.
- (37) *Divine Poems*, 15 and 121-7.
- (38) *Sermons vii*, 291, 294.
- (39) *Sermons v*, 259; viii, 102.
- (40) *Sermons vii*, 68.
- (41) Bald, 94; *Gerard: Autobiography* (see n. 5 above), 66.
- (42) Bald, 212.
- (43) C. S. P. Venetian (1607-10), 289-90.
- (44) John Boys, *Works* (1629), 277, cited in Bald, 226.

- (42) Thomas Fitzherbert, *A Supplement to the Discussion of M. D. Barlowes Answer* (1613), 105.
- (43) *Letters*, 160-4; Gosse i, 221-3.
- (44) *Pseudo-Martyr*, 168-72 and 207.
- (45) *Biathanatos*, 36; see also Ramsay, 148.
- (46) *Pseudo-Martyr*, 126 and 88.
- (47) St Ignatius, *Spiritual Exercises*, trans. Fr John Morris et al., ed. Henry Keane, S. J. (5th edn., 1952), 132.
- (48) *Pseudo-Martyr*, 143, 88.
- (49) *Pseudo-Martyr*, 176.
- (50) *Ignatius*, 41-2.
- (51) *Sermons*, ii, 178.
- (52) Gosse ii, 78; and Irat Husain, *The Dogmatic and Mystical Theology of John Donne* (1938), 144-5.
- (53) *The Courtier's Library*, ed. E. M. Simpson (1930), 74-5.
- (54) F. A. Yates, 'Paolo Sarpi's "History of the Council of Trent"', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 7 (1944), 123-43; and D. Baker-Smith, 'John Donne's *Critique of True Religion*', in *John Donne: Essays in Celebration*, ed. A. J. Smith (1972), 404-32.